



学校名：東村山市立 久米川小学校

氏名：杉本 万貴子

[担当教科：全科]

● 実践教科等：学級活動

● 時間数：5時間

● 対象生徒：1年4組

● 対象人数：27人

1 単元名

かんがえよう ぼくたち・わたしたちにできること

2 単元の目標

- ・モンゴルの生活、文化などへ興味・関心をもち、他国の文化を尊重する態度を育むことができる。
(つながりを尊重する態度)
- ・諸外国が直面する課題や日本との関係を知り、今、自分達にできることを考えることができる。
(他者と協力する態度)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・モンゴルの生活、文化などを知ること、世界には様々な文化や価値観があることに気付く。
(多様性)
- ・日本とモンゴルのつながりを知る。(連携性)
- ・諸外国の課題や日本の支援を知り、自分達にできることを考える。(責任性)

4 単元の指導について

(1)教材観

導入では「モンゴルクイズ」を行い、自分達と同じ「小学生」がどのような生活をしているのか異文化に興味をもたせたい。そして、自分達との違いだけでなく似ている点も多いことに気付かせ、異国の子供達のことを身近に感じさせたい。展開部では、「フォトランゲージ」「ESD クエスト」「JOCV の紹介」などを行い、諸外国が抱える課題に気付かせたい。まとめとして、今自分達ができることを考え、ポスターにして紹介する。

小学1年生という発達段階を踏まえた上で、丁寧な授業展開を行い、自分達自身にも「世界を変えることができる」という気持ちをもたせられるようにしたい。

(2)児童観

大変素直な気持ちをもった児童達である。スポーツの影響か国旗について詳しい児童や、アルファベット・ローマ字に興味をもつ児童も数名いる。5月に来た教育実習生のオーストラリアでのホームステイの話に興味をもって聞いていた。サンタクロースが半袖であることや、オーストラリアでしか見られない動物の話など、目を輝かせていた。しかし、遠い外国の話でしかなく、自分ごとに捉えるという態度までは養われていない。本単元を通して、世界の様々な国や文化に興味をもつことはもちろん、そこからさらに自分ごととして捉えさせ、「何かしたい」という気持ちを育んでもらいたい。

(3)指導観

小学1年生という発達段階を考え、現地で撮影した写真や動画を多く取り入れたり、現地で購入した模型や本、教科書などを紹介したりして、イメージがしやすいようにしたい。

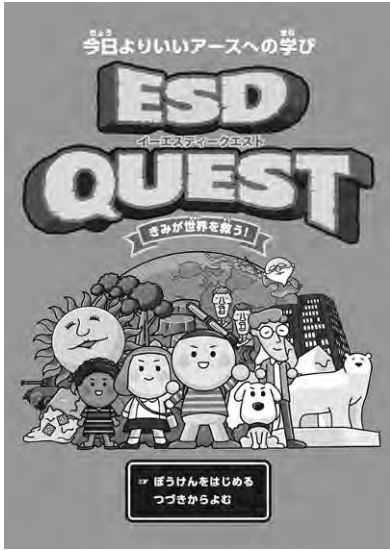
自分達に今できることを考える際には、身近な視点を与え、全体で考えを交流させた後に個々にできることを考えさせたい。また、それぞれができることが繋がり合って、諸外国の課題の解決に結びつくことを伝え、自己の力の大きさを感じさせたい。

5 評価基準

観点	他国の生活、文化に対する関心・意欲・態度	他国の生活、文化に対する国際的な思考・判断・表現
評価規準	・モンゴルの生活、文化などへ興味・関心をもっている。 ・写真を見て、異文化を想像している。 ・諸外国の課題に対して、何かしたいという気持ちをもっている。	・諸外国が直面する課題に対して、今、自分達にできることを考えている。 ・自分達にできることを、ポスターに表現している。
評価方法	発言、学習シート	発言、学習シート、ポスター

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	モンゴルについて しろう	モンゴルの地理的条件、言語、文化に触れ、異文化への興味関心を高める。	・モンゴルクイズをする。(パワーポイントを使用)  【モンゴルクイズスライド一例】
2	しゃしんを見ておはなしをつくろう	モンゴルという国の抱える諸問題に気が付く。	・4枚の写真(首都、馬に乗った少女、ゲルに住む家族、高台から見た町)をもとに、フォトランゲージをする。  【フォトランゲージに使用した4枚の写真】

3	かいがいやかつやくする人をしろう 途上国や地球環境の諸問題を知り、それらに対するJICA や JOCV の取組について知る。  モンゴルの子どもたちに かんきょうについて おしえる。 よこやま さん  モンゴルの子どもたちに バレーボールを おしえる。 かわむら さん 【JOCV の活動を知らせるスライドの一例】	・ESD クエストをする。  【ESD クエスト(参考資料参照)】 ・JICA の取組やJOCV の活動内容について の話を聞く。
4	ぼくたち・わたしたちに できることを かんがえよう 途上国や地球環境のために、自分達には何ができる か考える。	・ポスターを作成する。
5	できることをしょう かいしよう 途上国や地球環境のため の活動宣言をする。	・ポスターを紹介し合う。

7 授業事例の紹介

小単元名【 できることを しょうかいしよう 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月20日(金)第3限

(イ)実施会場 1年4組教室

(ウ)本時の目標

・途上国や地球環境のための活動宣言をし合い、これからの自分の生き方を考えることができる。

(エ)指導のポイント

・前時までの学習を簡単に板書で振り返り、思考の流れを整理した。

・全体での活動宣言の前にペアで紹介し合う時間をとった。

・紹介されたポスターは、分類して黒板に掲示していった。

・一人一人の紹介の合間に、その活動がどう課題解決に役に立つのか振り返ることができるように
補助発問をいれた。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方)
導入 7分	前時までの内容の振り返り	・前時までの学習の流れをおさえ、本時のめあてを知る。	一斉	・問答しながら、簡単に振り返らせる。 ・大事な言葉は板書しながら児童の思考を整理する。	

展 開 23 分	ペアの取り組む活動を聞くこと 全体に自分の活動を発表すること (それぞれの活動が、どの諸問題に関連しているかということ)	・ペアに自分の活動宣言をする。 ・全体に向けて自分の活動宣言をする。 ・自分達の活動が、どの課題解決に結びついているのか知る。	ペア 一斉	・その後の全体への発表を意識して、相手に伝える。 ・自分の考えた活動と友達達の活動を比べながら聞かせる。	自分達にできることを、ポスターに表現している。(他国の生活、文化に対する国際的な思考・判断・表現・ポスター)
ま と め 15 分	本時の学習の振り返り	・本時の学習を振り返り、学習シートに感想を記述する。	個別 一斉	・今日から自分がどのように生きていきたいかという視点で振り返らせる。	諸外国の課題に対して、何かしたいという気持ちをもっている。(他国の生活、文化に対する関心・意欲・態度・学習シート)

(2) 授業の振り返り

- ・4時に作成したポスターを一人一人、堂々と発表することができていた。声に出すことでさらに意欲があがったように感じる。
- ・節水や節電など、教師の方でカテゴライズして黒板に掲示していったことで、児童に友達の考えが振り返りやすくなった。
- ・自分の宣言した活動が、様々な面でつながって課題解決に役立つということを伝えしたが、真に理解してもらえたかは疑問が残る。今後も自分達の身近な所で、課題解決に役立つことができるということを折に触れて伝え続けていきたい。

(3) 使用教材

- ・パワーポイントによるモンゴルクイズ
- ・現地で撮影した写真、動画
- ・ESD クエスト



【児童が作成したポスター】



【授業の様子と板書】

(4) 参考資料等

ESD:Education for Sustainable Development-文部科学省<

<http://www.mext.go.jp/unesco/004/1339957.htm>>(2015 年 11 月 10 日アクセス)

8 単元をととした児童の反応/変化

- ・自分達にも「世界を変えることができる」という意識が芽生えた。
- ・水道の水が出しっぱなしになっているのを見た子が「先生、水を止めたよ」と言って来たり、「給食を残さないようにしましょう」と声を掛け合ったりしていた。
- ・担任がアメリカに旅行をした話をした際にも、自由帳の世界地図を見たり、地球儀を回したりしていた。

世界を身近に感じている様子が見られている。

<第1時の感想より(原文引用)>

- ・モンゴルにこんど行ってみたいです。
- ・モンゴルのことをもっとしりたいです。
- ・いっしょのところもちがうところもあってすごい。
- ・モンゴルのこたちにあってみたい。
- ・こくばんに にほんのはたがありました。
- ・もんごるのがっこうを日本がつくったのがすごかったです。
- ・いろんなくにでもおべんきょうをしてみたいです。

<第5時の感想より(原文引用)>

- ・そんなにあたられないこや、でんきをつかえないこのために、いっぱいへらしたいです。
- ・みんながちきゅうをたいせつにしよう。
- ・お水やでんきをむだにしたら、ちきゅうがこまることにきづきました。
- ・みんながせんせいのいうことをきいて、まずしいこどもたちもちきゅうもへいわになってほしい。
- ・せかいのもんだいがつながっていることがわかった。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

P・国際理解教育にはもともと関心があった。しかし、「国際理解教育」と大言できるような授業をしたことがなかったので、本研修に参加して、理解したいと考えていた。授業実践にあたり、渡航前には、とにかく興味・関心をもたせるために、担任自身が楽しい異文化での体験をたくさん行ってこようと考えていた。食や遊びなど、小学1年生にとって身近なことをとっかかりに興味をもたせようと計画していた。

D・現地では、JOCV の方の生の声が聞けたことが有益であった。学校の視察に行き、校長先生のお話をうかがったり、教科書を見せていただいたりしたことも、観光の旅行ではなかなかできないことでよかった。授業において、クイズや実物の紹介など、子供たちは意欲的に授業に参加していた。

C・世界の諸問題を自分事にとらえさせるために、1年生にはもっと丁寧に手だてをふまなければならない

いと再度認識した。今後モンゴルを教材に授業をする時には、導入から子供にたっぷり疑問・知りたいという気持ちをひきださせたい。授業において、子供たちの振り返りから、自分ごととしてとらえることができているかという点必ずしもそうではないと感じさせられた。

A・児童に、より自分ごととしてとらえさせるには、教師の「体験的な学び」が大切であるとする。生の外国の人とのコミュニケーションや、文化・生活体験をすることが、教師にとっても児童にとっても新たな学びを与えてくれると思う。次年度以降、自分が生きた教材になるので、説得力は増す。授業実践後、担任がアメリカに旅行したことを紹介した時にも、興味をもって聞いていた。普段長い時間を共に過ごす学級担任が体験したことは、子供たちにとって身近に感じることができる。伝え続けることが私にできることであり使命であるとする。そして、個人としてだけでなく、学校全体に国際理解教育を広げていくことと、シラバスに国際理解教育を盛り込んでいきたい。

以上のことより、成果としては①児童が外国への興味を強めたこと、②小学1年生なりに、世界のために自分ができることを一人一人が考えることができたことを挙げる。課題としては、発達段階を考えると、世界の問題を知り、それに対して自分も何かできることがあるという展開までが少し強引だったことが挙げられる。そのため、自然とそういった気持ちを芽生えさせる手立て、展開の工夫が今後求められる。

10 教師海外研修に参加して

丁寧な事前、事後研修により、国際理解教育の様々な手法を学ぶことができた。ESD 教育についても、中身を理解することができた。また、JICA の様々な取組を知ることができ、日本人として誇りを感じ、その気持ちを児童にも伝えることができた。

今回学んだことを今後も東京の子供達に還元し続けていきたい。